



Title	アスリート言説の言説空間：新たな<スポーツする主体>の登場 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	石井, 克
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 乙第7202号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92066
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Ishii_Masaru_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：石井 克

学位論文題名

アスリート言説の言説空間:新たな〈スポーツする主体〉の登場

本論文は、現代社会において多様な場面で用いられている「アスリート」という語の用法を分析し、これに社会的意味づけがなされていくそのプロセスを、スポーツ言説における言葉の葛藤に着目し明らかにすることを目的としている。この目的を達成するため、本研究は、大きく次の三点に着目し分析と考察が行っている。

第一に、アスリート言説の特徴やその語の使用時期の特定およびその動向を、公文書やメディアにおける語の使用に着目し明らかにする。第二に、実際にスポーツ言説に「アスリート」の語が用いられることで、そこではいかなる〈スポーツする主体〉が出現しているのかを、その語の機能に着目し分類を行い分析する。第三に、先の二点を踏まえて、分類された機能が同じひとつの「アスリート」の語に収斂することで、アスリート言説はどのような規則性を持ち言説化しているのか、また、そのことで現代のスポーツ文化がいかなる様相を呈しているのかを解明する。

具体的には、第一章ではアスリート言説を分析するための研究方法が整理される。その過程で本論文における言説の概念が定義され、いかなる立場に基づき言説分析を行うのかが検討される。本論文は「解釈主義的言説分析」の立場から、広田が提示する言説空間の二つの分析モデルである「共通姓—合意」モデルと「差異—葛藤」モデルに依拠しつつ、歴史社会学的にアスリート言説を分析することが述べられる。

第二章では、次章以降のアスリート言説の分析に必要なスポーツの歴史を把握するため、近代スポーツ史が概観される。特にここでは本論文に直接関係がある、近代スポーツの発祥地として知られるイギリスのスポーツの歴史が分析され、〈スポーツする主体〉がどのように位置付けられ、いかように語られてきたのかが、アマチュアとプロフェッショナルの概念の起源から整理される。

第三章では、アスリート言説の分析を行うための予備調査として、新聞報道における「アスリート」の語の使用に関する計量分析が行われる。そのために、新聞記事検索のデータベースとテキストマイニングのソフトであるKH coderを活用し、「アスリート」の語の出現回数、年代ごとの使用状況、関連性を有する語の出現状況などの調査と分析が行われ、「アスリート」の語の使用状況とその大きな特徴が検証される。

第四章では、前章の予備調査で明らかになった「アスリート」の語の使用傾向等に基づいて記事を選択したうえで、アスリート言説によって編成される〈スポーツする主体〉の特徴が質的考察により明らかされる。新聞報道において用いられる「アスリート」という語の使用が着目され、アスリート言説が機能することで構成される〈スポーツする主体〉が個々の特徴に分類され考察される。プロ/アマ区分の無効化、健常者との平等化を目指す「障がい者」、自立と社会貢献、身体の自己管理、自己表現という主体化の諸特質と、実際の言説でのその幾重もの関係性が分析される。

第五章では、第四章で明らかになったアスリート言説の機能と〈スポーツする主体〉の特徴を踏まえて、アスリート言説によって編成される〈スポーツする主体〉が、言説空間においていかなる規則性のもとで言説化しているのかが、「アスリート」を特徴的に使用している一連の言説をもとに解明される。言説空間はそうした事例を通じ

て、商業的要素が社会的活動によって正当化される「共通性—合意」モデルにおいて、また教育的側面と芸術的側面が論争する「差異—葛藤」モデルにおいて描出される。

論全体として、言説空間上に編成される文化としてのスポーツが、人びとにどのように作用し、人びとの関係性や集合を再編してきたのかが、歴史的・社会的文脈を踏まえて明らかにされた。また、こうしたアスリート言説によって編成される〈スポーツする主体〉は、近代スポーツの特質であった階層意識や金銭意識に基づく区分のもとで位置付けられてきた主体のあり方とは異なる意識により主体化していることも明らかにされた。

本論は以上の考察に基づいて、アスリート言説が言説空間上に言説化する際には、〈スポーツする主体〉が主体化するための主題がメディアで正当化され、あるべき〈理想〉として提示されるモデルを反映したメディア言説として行われていることを指摘する。メディアにおけるこのような「アスリート」の使用は、従来の「(スポーツ)選手」に表徴されてきた「競技」の意味を拡大させながら、理想的主体としての意味が含意されたロールモデルとしても機能していることが触れられ、このように社会を反映する理想的主体としての「アスリート」がメディアで語られることが、反面では社会におけるノマドワーカーとしての主体化を促進する機能も有していることが最後に指摘される。